

わたしたちは五感というものを持っております。聴覚・視覚・嗅覚・味覚・触覚です。その中で一番刺激に慣れやすく、鈍ってしまいやすいものは何だと思われませんか。答えは嗅覚だそうです。わたしたち人間は、それぞれ異なった食生活や汗の臭いの違いから誰もが固有の臭いをもって生きております。しかし、誰でも自分の臭いは感じないのが普通だそうです。

たまに人格も教養も品格も兼ね備えながら、どうしても好きになれない人がいます。申し分ないはずなのに何か臭うのです。おそらくそれは勝利者の臭いではないかと思うのです。ことわざにも「わが身の臭さ、われ知らず」とありますが、それは体臭のことよりもその人のふるまいのことを言っています。自分のことは以外と自分では分からないということです。

申命記と同じ旧約聖書の中に、民数記という記事があります。その22章にバラムという占い師の話が記されています。バラムは初め神からバラクの招きに応じて一緒に行ってはいけないと示されたにも関わらず、「王はあなたを優遇すると言っておられます」と言われると「再度神意を確かめてみよう」と答えます。その結果、今度は神から「行っていい」という返事をもらったように思い込みました。

しかし、それは自分の欲望の投影だったようで、神はバラムの行く手を剣をもって立ちふさがって阻止しようとされたという話です。

この話は、わたしたちがこれは神のみこころだと思ってしていることの中にも、ずいぶん自分の欲望の投影があって、間違った判断をしてしまっていることが往々にしてあるということではないでしょうか。

本日の聖書の箇所である申命記6章において、モーセは荒野の旅を終えるにあたり、人々にマサでしたような罪を再び犯すことのないように、主の目に正しいことを行えと勧告しました。

マサというのは出エジプトからの長い旅の途上、とうとう水が無くなり、もうダメだと思った人々が、自分たちをこんな苦境に追いやったのはすべてモーセの

せいだと決めつけた土地の名前です。彼らは自分では何もしなかつたくせに、苦しくなるとモーセの責任にして意志で打ち殺そうとしたのです。

その時、モーセは神に対して「わたしはどうしたらいいのでしょうか」と問うています。カベにぶち当たるとき、何が正しい行動か分からなくなってしまう時、わたしたちは見えないものより見えるものを優先してしまいます。後から考えれば愚かな人の道も、その時の自分には正しく見えてしまうのです。モーセはその時、主に問うということをしました。

モーセは、問うということと同時に、主の定めや掟を守れと言います。律法に従って神と人を愛し、公平を守れというのです。この掟(ミシュパート)という言葉は「公平」とも訳され、聖書では強い者が弱い立場の人を配慮することとして用いられます。

ただやみくもに「問え」ではなく、弱い立場の人が守られているかどうかということが、神のみこころを問う基準なのです。自分の都合をなりふりかまわず優先するのではなく、立場の違う人の利益ややり方に配慮を加えてゆく時に、あなたは神の正しさが見えるのだというのです。わたしたちも受難節を迎えるにあたり、同じ過ちに陥らぬよう心しく願います。